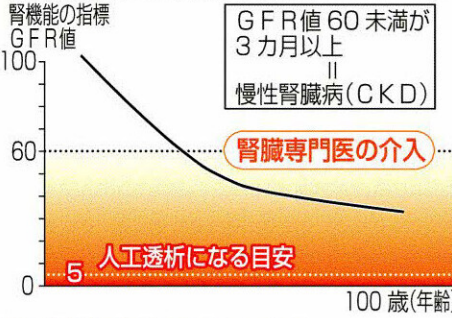


山梨県立中央病院腎臓内科の長沼司医師(34)は、県内ではまだ少ない腎臓内科の若手医師の一人。腎臓病の発病初期から透析期まで

やまなし  
医療最前線  
令和を担う  
県立中央病院から

(179)

腎臓内科医が目指す治療のイメージ



一貫して診ている。「腎臓能を守り、透析患者さんを一人でも減らしたい。腎臓能は悪くなって時間がたつと元に戻らないので早めの

対処が必要。人生100年時代を迎える中、腎臓能を生涯維持する

「腎生100年時代」を目指したい」と話す。中央市出身。人のためになる仕事として医師に憧れ、駿台甲府高

卒業後、神奈川県聖マリイナナ医科大に進学。卒業後は「生まれ育った山梨のために地域医療に貢献したい」と帰郷し、同病院に就職した。

腎臓内科・長沼司医師

「腎生100年」へ重症化防ぐ

ると人工透析や腎臓移植が必要になるほど重症化してしまつたため、「透析に至らないように生活習慣の改善と細やかな処方調整によつて進行を抑えることが重要」。

山梨は透析患者の割合が全国平均より高く、糖尿病性腎臓病から新たに人工透析が必要となる患者(人口10万人当たり)は2010年の国の調査で全国最多だったことから県のCKD対策協議会が発足。地域のかかりつけ医から腎臓専門医へ紹介する目安として、「腎臓能の指標である糸球体ろ過量(GFR)値60未満が3カ月以上」など具体的な基準を設け、軽症段階から専門医へつなぎ、重症化を防ぐ取り組みも始まっている。

病によるものから、糸球体腎炎のように免疫の異常によるものなどさまざま。原因によつて治療法が異なるため、広い視野で総合的に診療している。

近年は生活習慣病による腎臓病が増加傾向で、慢性腎臓病(CKD)は成人8人に1人がかかる新たな国民病ともいわれる。放置す

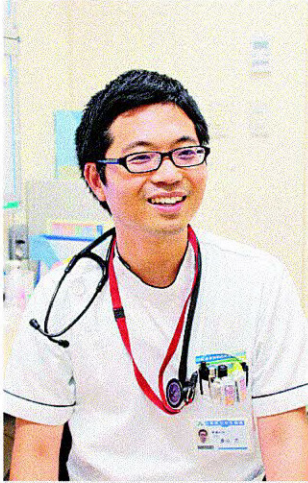
「病気だけでなく、人を診る」というのが医師としての理念。「1人の患者さんと対話し、長く付き合うことができる」と、同科を選

た。長沼医師は、「腎臓の診療を通して、大好きな地域の人の命や健康を守りたい」と思いを新たにしている。

平成から令和へ時代が移った。日々進化する医療現場で活躍する、30代の若手医師たちを紹介する。第2、4木曜日に掲載します



平成から令和へ時代が移った。日々進化する医療現場で活躍する、30代の若手医師たちを紹介する。第2、4木曜日に掲載します



ながぬま・つかささん  
2009年聖マリアンナ医科大卒業後、山梨県立中央病院での研修を経て現職。腎臓専門医、透析専門医、総合内科専門医。中央市出身。34歳。2児の父。